

ナイチンゲール—地域福祉への貢献

— 看護は芸術 (Art) である —

広島文化学園大学看護学部・看護学研究所

佐々木 秀 美

■ はじめに

ナイチンゲールの様々な業績から彼女の哲学を検証していく過程で、彼女の哲学は、彼女自身の日常生活における観察から導き出された人々の健康に関する普遍的な原則と、それを実施すべき統治者の責務に言及していることを発見する。ナイチンゲールの思想は、エドワード・クック¹⁾が「健全な哲学」²⁾であるとして、後の発見によっても覆されることのない良識の哲学であると評したように、看護の本質探求と同時により人間性の深奥を極めた人間の本質探究に基づくと考えられる。“看護は芸術 (Art) である”とのナイチンゲールの言葉は、救貧院病院の看護に尽くしたアグネス・ジョーンズ³⁾の業績に対する最高の賛美の言葉である。アグネスは、この世で最低の無秩序な病院集団の1つを、キリスト教的規律にふさわしいものに変容させ、病人の福祉に関わる教区委員会や救貧法委員会の考えを改めさせた。ある対象の好ましくない状態を改善して望ましい状態へと変えることは救済 (salvation) とも言われるが、ナイチンゲールは、画家がキャンバスに絵を描くことが芸術であると言われるのならば、生身の人間の生命に変化を与えるという事ができる看護は、救済という言葉以上に最高の芸術であると述べた。

地域福祉という観点からナイチンゲールの貢献について論じた場合、福祉という言葉が人々の幸福という意味である事、幸福の意味がより良い日常生活をよりよく生きることであること、よく生きる為には健康であることが重要であるという事、つまり、幸福であるという事は健康であると

いう事であるとの見解が導き出される。ゆえに、幸福であるという事の背景には人間存在の問題が大きく横たわっている。ナイチンゲールは「足に靴のない極貧の子供も、最も高貴な生まれの子供も、同じように看護を受ける権利があり、そうした子供たちも看護の仕事に就くことが可能であり、事の成就を求めるならば同じように最高の厳しい務めを耐えなければならない」⁴⁾と述べた。この言葉をストレートに受け止めれば看護師の訓練について述べているように思えるが、実は看護を受ける人の権利についても論究しているのである。そして、そこには看護を受ける者と看護を引き受ける者の訓練の機会均等という平等の概念がある。また、そうした子供たちも看護の仕事に就くことが可能であるという言葉からは、職業選択の自由と機会均等、つまり、平等にという事が含まれている。つまり、それは、人間が生まれながらに有している教育権・幸福追求権のことであり、万人に与えられている自由と平等の権利、つまり、基本的人権を意味している。基本的人権は、自然権とも呼ばれ、生まれながらに持つ不可譲の権利のことを言う。人権はその代表的なものとして言われている。自然権は、古代ギリシア以来の自然的正義に基づいて人間本性が持つ権利であると考えられてきた。

人間性の概念はラテン語の *fumanitas* であり、この言葉の創始者はケケロ⁵⁾まで遡る。そして、この思想は、善や真理の根拠を、神でなく理性的な人間の中にみいだそうとした思想であり、人間中心主義あるいは人道主義 (Humanism) とも呼ばれる。人道主義は“慈善活動”“博愛”“人類愛”

などとも呼ばれ、博愛主義 (Philanthropy) と同義語として扱われ、一般的に貧民救済運動としても知られている。宗教的な救済は、現世における悲惨な状態が宗教に帰依することで解消または改善されることも意味し、ヨーロッパでは、主としてキリスト教的な立場からの救済が始まった。貧民救済に関する国家的な取り組みは、イングランドの救貧法 (Poor Laws) が最初である。イギリスでは1531年に救貧が始まり、貧民増加による社会的不安を抑制する目的でエリザベス救貧法が制定され、幾度も改正が繰り返されて結果的に福祉国家イギリスの出発点となった。

生存の問題が何にも増して優先される社会において貧困者の生命を守ることは、ナイチンゲールにとっても重要なことであった。ナイチンゲールは、博愛主義者であるウィリアム・ラズボーン⁶⁾の要請によってリヴァプールの救貧院病院にアグネスを送り出した。アグネスは激しい務めにも耐え、その職責を十分に果たしたが、志し途中で死去した。ナイチンゲールにとって、彼女の死は無念でならず、敗北に近い絶望感を味わった経験であると共に、黙して置けない事態でもあった。ナイチンゲールは「ひとりの女性がなくなった。魅力あふれ心豊かで、また若く才気に満ちた女性が亡くなった。」⁷⁾と書き、アグネスは思いを内に秘めた寡黙の女性であり、自分を目立たせないようにしながら、神々しい天性によって際立つ女性であったと書いた。

先述したナイチンゲールの言葉、成就を求めるならば同じようにとは看護教育の実施に際しては平等に最高の厳しい務めを耐えなければならないという事である。激しい務め、すなわち教育についてナイチンゲールが「Discipline (訓育, 訓練, 規律)こそが訓練 (training) の本質である。」⁸⁾と述べたことから彼女の教育観が理解できよう。Disciplineの語源はラテン語のdisciple(学ぶ)であり、多くはキリスト教に象徴されるように、戒律や規律によって人格の陶冶を目指す精神修養の事を言う。ゆえに、訓練は、修行僧が自己自身に過酷な苦行を強い、身体的・精神的限界まで自身を追い込むことによって悟りを開く世界のことである。アグネスを賛美した上で、ナイチンゲールは、自分を訓練することは休みのない仕事であるがゆえに看護は一つの芸術であるとも述べた。その言葉は、アグネスの死を悲しんだナイチンゲールの結論的言葉であるが、それは、地域福祉に

貢献し、人間の虚栄を持たない女性賛辞の言葉である。そこで、本論では、アグネス・ジョーンズの死を悼んだ文章を手掛かりに、イギリス国家の福祉政策及びそれに関わる思想的背景を探求し、地域福祉のあり方について論究する。

1. 地域福祉の概念と幸福論

地域福祉について筆者は『現代社会と福祉』⁹⁾で一部論述した。福祉 (Welfare) とは、日常生活を営む人々の“しあわせ”や“ゆたかさ”を意味する言葉である。福祉の福は幸福の福であり、福祉の祉は神が授ける福やめぐみ・幸の意味であり“しあわせ”を意味する。ゆえに福祉とは、すべての人々が幸福であるという事を意味する。又、“Welfare”を英語辞書で逆引きすると幸福を意味し、健康・快適な生活等を含めた意味での幸福を意味している。次に幸福という概念を『哲学辞典』で検索すると、幸福は“Happiness”と英訳され、一般に心身の要求が満たされた状態であると説明されている。私たちすべてはいかなる価値観をもっていようと、個々人において幸福に暮らしたいと考へない者はないであろう。幸福を個人の感受性的要求の満足 (快楽) と考へる者、消極的に苦痛や不快のない状態、あるいは無欲などの精神的独立の状態と考へる者、自我や人格等の全体的、永続的満足とみなす者、超現世的宗教的悦楽と為す者等が存在する。その幸福は個々人によって違う。お金がある者は愛情を分かち合えるものが欲しいと願うであろうし、それ以上の事を求める場合もある。貧困にあえぎながらもその日、食べ物にありつけた時、普通に暮らしながらも一日の仕事の後の入浴が最も至福の時間であると思へる者、おいしい食事で幸福感を味わう者、長年欲していた物が買えた時に味わう幸福感など列挙するにいとまがない。つまり、それは人々の日常生活の暮らしの中に幸福があるという事であり、それを実感するかしないかは個々人の考へ方である。しかしながら、個々によって相違のある幸福の感覚も普遍的な原則・概念が存在し、万民にとって共通な思想は法制度に反映される。

福祉国家思想そのものは18世紀のイギリスや、ドイツ絶対主義国家のなかで形成されたものである。イギリスでは、自由主義に立脚したジョン・スチュワート・ミル¹⁰⁾やトーマス・ヒル・グリーン¹¹⁾らによって論じられた。ミルは、「自己の意見を実行する自由とは、自分自身の責任と危険とにお

いてなされる限り、同胞たちによって肉体または精神上の妨害を受けることなく、自己の意見を自己の生活に実現していくことの自由という意味である。』¹²⁾と述べた。つまり、個人の自由とは自分自身の責任において、他者の自由を妨害しないようにしながら、自己の生活に上で実現していく事である。ドイツのクリスティアン・ヴォルフ¹³⁾は、福祉助成の理念によって、高権的な警察国家における福祉国家を提唱し、イマヌエル・カント¹⁴⁾は、国家依存ではなく公共性に依存した福祉を提唱した。国民の幸福という思想に立脚すれば、国家依存ではなく公共性に依存した福祉も必要であるが、国家的な立場からも、国民の生命と財産を守るという双方向の制度が求められる。

18世紀初頭のイギリスの哲学者デヴィッド・ヒューム¹⁵⁾は、幸福について知性と情緒のつながりとしての意志決定論を、動機における情緒の優越を承認させ、更に社会的存在としての人間の道義的、社会的諸問題として説明し、功利論 (Utilitarian theory) に導いた。近代哲学では功利主義 (Utilitarianism) がこれにあたる。功利主義というのは、行為や制度の社会的な望ましさは、その結果として生じる効用あるいは有用性 (utility) によって決定されるとする考え方であり、“最大多数の最大幸福” という言葉で有名である。功利主義の第一人者として有名な哲学者はジェレミー・ベンサム¹⁶⁾である。ベンサムは、福祉 (Welfare) という言葉は、測定する必要がある全体的な状況を示すには、幸福という言葉よりも適しているかもしれないと述べ、一人の人間が一定期間に経験するあらゆる種類の快楽の総量とあらゆる種類の苦痛の総量との価値の差であると述べた。そして、「一人の人間の幸福は別な人間の幸福では決してなく、ある人にとっての利得は別な人の利得ではない」¹⁷⁾と述べ、自愛的利益は、他の利益全部を併せたものより優越していると述べた。中でも最も、強力で、最も持続的な広範な動機は肉体的願望、富への愛着、安楽への愛着、生命への愛着及び苦痛への恐怖という諸動機である¹⁸⁾。そして、全ての個人が幸福を増進させたいという願望によって動かされていると想定するならば、協同社会成員の最大幸福を倫理原則の規定に従って行為することは期待できない。ゆえに、個人の幸福は協働社会の幸福の一部である¹⁹⁾と考えた。そこには、人間社会のあらゆる価値の根元が個人にあり、他の何にもまさって個人を尊重

しようとする原理がある。ナイチンゲールの父親であるウィリアム・エドワード・ナイチンゲール²⁰⁾は、ベンサム主義者の一人として考えられているが、ナイチンゲールは成長過程において、父親から父親の哲学とその家庭内での娘たちに接する功利主義的教育観に触れる機会があった。その影響を大きく受けたと考えられるナイチンゲールは、彼女自身が幼い時から経験した日常生活上の問題について認識し、理想的な女性の生き方について思案をしたのであろう。それは、女性のライフサイクルの問題であり、女性の幸福な生き方について深く論究したと考えられるのである。個人の尊厳は、およそ個々の人間の幸福という意味に理解され、国民主権を主眼とした我が国の日本国憲法にも、基本的人権において自由・平等・幸福の概念が具現化された。そこには平和的な国家の存在のあり方が示されている。

そして、19世紀になってイギリスで、人間の幸福を健康と関連させて『幸福論』を著したのは、バートランド・アーサー・ウィリアム・ラッセル²¹⁾とカール・ヒルティ²²⁾である。ラッセルの『幸福論』²³⁾によれば、幸福な人とは、食と住、健康、愛情、仕事上の成功、そして仲間から尊敬である。ヒルティの『幸福論』²⁴⁾は、心の謙虚という門をくぐって初めて実現できるのが幸福であり、普通、心の謙虚という門が、幸福への出発点であるとの考えである。彼は、苦しみはその人の内的素質に応じて人間を強くし、幸福な時には、苦しみにどれだけ耐えうるか自信がないが、苦しんで初めて自身を知る。そうした経験の積み重ねは、最も幸福な瞬間にも静かな厳粛さをもって控えめに慎重に振る舞い、その反対に苦しみは、いかなる人生においても春がやってくると確信し、節度ある態度を教えると説く。確かに健康は貴重な宝であるが、しかし、失って初めてその価値を知るという事は、日常の中で誰もが経験する。逆に健康を失えば不幸であるかと言ったら、必ずしもそうではない。病気のままで生涯の大部分を過ごす人も多くあり、病気と幸福とは絶対に相いれないものでもない。病気にもそれなりの意味があり、日常生活にその病気を促進している問題があるとしたらこれを取り除いていく必要はある。つまり、病気はより良い生活への通路となり得る。健康は個人にとって貴重な宝であるから、その事に感謝をして生活をする事が幸福な生き方である。人間の身体と精神の健康に最も有害なのは道徳的な

欠陥である。この世の中で、最も健康な生活は、清らかな心と優れた思想を持ち、「絶え間ない有益な活動の状態こそが、この地上で許される最上の幸福な状態」²⁵⁾ であるとし、単純な仕事をするところこそがどんな健康維持法より優れていると述べた。加えて、「人々が意識に目覚めた最初の時から意識が消えるまで、最も熱心に求めてやまないものは幸福の感情であり、人間の生活目標である。」²⁶⁾ とヒルティは考えた。しかし、彼が言うには、幸福に到達する道は、全ての人に明らかであり、開放された道であるが、その道を知っている人が必ずしもその道を発見するとは限らない。だから、真理の探究において私たちの幸福を制限するものに対して防ぐ手だてが必要なのだと説く。ヒルティが述べたように、有益な活動こそが、この地上での最上の幸福な状態であるとしたら、有益な活動状態を人々が維持する為に、人々が健康を維持できるような方法の手立てを考えていく事こそが、人々を最上の幸福に導くことにつながる。この確信が得られれば、同時代にあってナイチンゲール自身も有益な活動をするべきという信念を持つに至ったであろう。同時に、人々が有益な活動ができるよう、健康問題改善に向けた方策を考え、実行することこそが地域福祉につながる最良の策であるとの考えを有したと考える。

2. 人権思想の流れと地域福祉

福祉の概念が人々の幸福追求であると考えられるならば、人々の健康に着目し、その為の働きかけは、人々の幸福追求に寄与する活動であり、人々の人権 (Human Rights) 擁護に関する活動である。人権とは、近代ブルジョアジーの自由と平等の要求が、実現させた人間としての権利のことである。人権思想は、人間が人間として生まれながらに持っている権利であり、通常、社会的権利・社会権ともよばれている。社会権とは、基本的人権の一つで、人間が人間らしく生きるための権利の事を言い、生存権、教育を受ける権利、労働基本権、社会保障の権利など基本的人権で保障されている権利である。それは人間が生まれながらに有している権利であり自然権と呼ばれる。自然権は自然法 (Natural law) に基づく概念である。自然法の重点は何よりも自由・平等・幸福追求の権利である。これらは、事物の自然本性に基づく法則であり、その法則は自然と調和した普遍的・永続的な概念・原理である。それは、人類の普遍的

価値である人間の自由と平等を中心とした基本的な善や真理を、神でなく理性的な人間の中にみいだそうとしたものである。この権利を主として人類・人間社会を念頭に置いて使用する場合、“倫理”と意味内容が重複する概念となる。これらは、事物の自然本性に基づく法則あるいは規範の意味がある。その基本的な概念・原理はわが国の憲法第十四条に示され、すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されないということである。

そして、幸福主義 (Eudemonism) は倫理の究極目的、行為の基準を幸福に置くとする考えであり、この主義の代表的哲学者はアリストテレス²⁷⁾ である。彼は著『ニコマコス倫理学』²⁸⁾ で、人間が行う活動の目的には幸福がある。幸福な生活のためには、人間が良く生きることであり、良く生きる為には健康が重要であると述べる。つまり、幸福であるということは健康であることに他ならない。アリストテレスは、人間の行為にはすべて目的があり、それらの目的の最上位には、それ自身が目的である“最高善”があるとした。人間にとって最高善とは、幸福、それも卓越性における活動のもたらす満足のことである。幸福とは、たんに快楽を得ることだけではなく、人間の霊魂が、固有の形相である理性を発展させることであるとする。ゆえに幸福主義は人間性を尊重し、これを束縛し抑圧するものからの解放を目指す思想であり、人間性の擁護を目指したものである。そして、その権利は国際人権規約の市民及び政治市民的権利に関する国際規約において生存権は非常事態時も違反を許されない自由権の一つとされている。

トマス・ホッブズ²⁹⁾ は、封建社会における特権を中心とした権利観念を転換し、これまで自明の存在であるとされてきた共同体や社会の存在を解体した自然状態を想定し、全ての人間は自由で平等な自己保存の権利を持つとして自然権の普遍性を唱えた。その上で自然権が持つ自己保存の性格が時には自己の意志を妨害する外的障害を排除するために、他者の生命・身体を脅かす可能性を有し、その結果“万人の万人による闘争状態”を招く。ゆえに、理性の推論的帰結としての自然法の存在と各人の自己保存を維持するための社会契約に基づく国家の必要性を唱えた。ホッブズの哲学は、自然法に基づいて神が自然権を付与するという考え方ではなく、法は人間によって創設され

るもので、自然法もまた自然権から発生したものであるという法概念である。ホブズはまず、生物一般の生命活動の根元を自己保存の本能とする。その上で、人間固有のものとして将来を予見する理性を措定する。理性は、その予見的な性格から、現在の自己保存を未来の自己保存の予見から導く。ホブズが展開した国家理論は、自然状態から人工的に国家モデルをつくりあげたという点で、近代国家理論のさきがけであり、平等な個人間の社会契約による国家形成という新しい視点を開いた。またこのような社会契約の要因として、人間の自然理性を重視していることから啓蒙主義的な国家理論である。ホブズの理論を批判的に継承したのは、ジョン・ロック³⁰⁾とジャン・ジャック・ルソー³¹⁾である。ホブズが自然状態において自然法が不完全であるとするのに対し、両者は自然状態においてすでに自然法が貫徹されていると想定していることである。そして、ホブズは、永遠の生の歓喜と、救済とは同一のものであるとして、救済は、特定の諸悪（欠乏・病氣・及び死）に対して全体的に保障されるという考えを示した。

ロックは、自らの政治哲学を自然状態（State of Nature）であるとし、自然状態下における人は全て公平に、生命（Life）、健康（Health）、自由（Liberty）、財産（所有—Possessions）の諸権利を有し、誰もが自由であり、誰もが他の者の諸権利に関与する権限はないと説いた。また、人間の自由を制約するものは自然法だけであり、それは理性の法と同じである。理性は自己及び隣人の生命を保存すべきこと、また、他人の生命、健康、自由、財産を侵害してはならないと述べた。ロックの哲学の自然的存在としての人間についてのもう一つの考えは、性善説的な人間観に基づくものである。その人間観は、国家の成立していない自然状態において、人間は自由で平等な独立した存在であるという事である。ロックは、個人の自由・財産・健康の保持を所有権としてこれらは自然権の一つとし、個人が権力を移譲して打ち立てる国家は所有権の調整と保護を行う責務を持つと考えた。そこで、ロックは、個人の自由を最大限に尊重し、国家は他者の権利や自由を侵害する不正な犯罪行為に対してのみ、権力を行使して刑罰を与えることが出来ると考えた。それは、自己保存の中に更に広範な自由の概念や財産権を含み、国家は社会契約によって成立するもので、国

家が統治契約に背いてその自然権を侵害すれば、国民は抵抗権によって革命も正当化されるとして自然権の優位性を唱えたのである。ロックの思想は自然権の社会化をもたらすとともに、資本主義や市民社会に理論的正当性を与え、イギリスの市民革命やアメリカ独立戦争に大きな影響を与えた。そしてフランスのルソーに影響を与え、我が国では明治初期の板垣退助らの自由民権運動に影響を与えた。

『社会契約論』³²⁾においてルソーは、社会契約と一般意志なる意志による政治社会の理想を論じ、社会契約が今後の理想であると説いた。それは、あくまでも一般意志による全体の一致を目指しているが、その理由は、ルソーが、政治社会（国家）はすべての人間の自由と平等をこそ保障する仕組みでなければならないと考えたことによる。ルソーの理想は、政治が一般意志に服従するというものであり、絶対的な人民主権、つまり、国民主権である。そして、自分自身の生命を勝手に処分することができないのに、この自分たちが持っている権利を主権者に移転し得るのかという命題を投げかけながら「他人の犠牲において自分の生命を保存しようとする人は、必要な場合にはまた、他人の為にその生命を投げ出さなければならない。」³³⁾と述べた。

ルソーは、また、『人間不平等起源論』³⁴⁾で自然状態と、理性による社会化について論じた。その論によれば、理性によって人々が道徳的諸関係を結び、理性的で文明的な諸集団に所属することによって、その抑圧による不自由と不平等の広がる社会状態が訪れたとして、自然状態の自由と平和を好意的に描き、社会状態を墮落した状態であると考えた。また、ルソーは人類の中に二種類の不平等があるとして、その一つに自然的あるいは身体的不平等を掲げた。自然的あるいは身体的不平等は、年齢や健康や体力の差と精神あるいは魂の質の差である。二つ目は、一種の約束に依存し、人々の合意によって定められて成り立つ社会的あるいは政治的不平等である³⁵⁾。ルソーは、「自然がもし、われわれを健康であるように運命づけたのなら」³⁶⁾と述べ、身体的不平等は、生活様式における極端な不平等、ある人には過度の余暇、他の人々には過度の労働、われわれの食欲と情欲、不消化を助長する美食と貧者の粗食、夜更かし等の不節制、情念の過度の激発、精神の疲労困憊等、あらゆる身分差によって引き起こされるから、人

間の病気の歴史は政治社会の歴史をたどることによって容易に解明できると述べた。他方、その魂が永遠に蝕まれる無数の悲哀と苦痛の経験といった不幸の経験は、自身の仕業であると述べた。ルソーが述べたがごとく、人類の不平等の中で、豊かな生活様式の中で、病気について良く知っていて自身で健康状態を維持できる人々とそうでない人々、生活様式における極端な不平等、ある人には過度の労働、貧者の粗食、精神の疲労困憊等、あらゆる身分差によって引き起こされる社会的不平等がある。ゆえに、社会的不平等は、富者と貧困者を作り出しているという点でイギリス国家が抱える政治的・社会的課題であった。そうした深刻な課題は誰もが手をつけたくない解決困難な仕事であった。その困難な事業に取り組んだのがナイチンゲールである。ナイチンゲールは、「現事態における最大の奇跡は、健康なのかそれとも病気なのか。また生なのか死なのか。われわれのうちのある者にとっては、自分たちの無知と怠慢とが作り出している環境内で卑しくも生きていられるということ、これは毎日繰り返されている最大の奇跡である。」³⁷⁾と述べた。ナイチンゲールにしてみればこれらはまさに社会悪であった。

3. 人々の健康問題改善に向けたナイチンゲールの取り組み

クリミアから帰還後にナイチンゲールが実施した取り組みの根幹には、人々の健康問題があり、そこには自然法に基づいた人間の生存権・幸福追求権といった人間存在の問題からの人権問題が大きく横たわっていたという事である。陸軍の改革及び看護教育の開始は、劣悪な病院環境および質の悪い看護師の一掃につながり、病院看護を良くしたことで、人々の健康問題に貢献した。また、教育された看護師による看護活動には、地域住民の健康の維持・増進活動として『町や村での健康教育』³⁸⁾があり、それは更に『救貧院病院における看護』³⁹⁾、『貧しい人々の看護』⁴⁰⁾に発展し、“地域看護”という新しい取り組みに成功した。また、それはイギリス社会の恥部と呼ばれるほどの劣悪な環境下で生活する貧民救済に向けた救貧法改正にも発展した。そして、当時、イギリスの植民地であったインド人民の劣悪な環境改善・勧告をイギリス国家に為した取り組みをまとめた著作が『インドにおける生と死』⁴¹⁾である。

まず、健康を害した人が病気の治療目的で入院

する病院環境の悪さである。ロンドン中の病院を見渡したナイチンゲールの結論は、病院の構造上の問題とそこに働く看護師の粗悪さであった。ナイチンゲールの著作『病院覚え書』⁴²⁾によれば、まず、当時の病院の構造上の問題は暖房もなく、窓は締め切られていた。風通しの悪い室内の壁は滴が垂れ、カビや細菌が繁殖していた。病院の排水や便所、流し等は旨くできておらず、下水が逆流してその発散物が病室へ流れ込んでいた。その上、病人は看病するものもなく放置されていた。病院の療養環境は、人々が健康的に暮らす生活の場同様、心身の回復に適した清潔な環境でなければならない。彼女は著作の中で、病院とは患者が健康を回復し、健康が増進して社会復帰をする為の学習の場であるべきなのに、そうではなくあるべき病院の機能が果たせないで多くの患者が死亡していると述べた。そして品性の良くない看護婦達の存在がその病院の機能をさらに貶めていた。そこで、ナイチンゲールは、病院環境改善の為の取り組みをする一方で、病院看護を良くする為に女性達を訓練するといった一大事業を展開した。それが看護専門職教育の第一歩であった。教育された看護師達による公衆衛生及び健康に関する活動は、社会的評価を高め、教育の成果として大成功を収めた。そして、ロンドンの貧しい病人の中で、真の看護を必要としている人々のベットサイドに訓練された看護を提供するという、真に国民的な事業の端緒が切って落とされたのである。

次に、地域看護 (District Nursing) や訪問看護 (Visiting Nursing) の着想である。地域看護は、1861年に、博愛主義者であるラズボーンが貧困者救済事業の一環として、ナイチンゲールの門をたたいたことから始まった。彼の提唱による特定地区の家庭訪問看護計画は一種の実験であり、社会改革であった。彼のリヴァプールにおける成功がロンドンにおける新たな改革へとつながった。次に、救貧院当局長官によって任命された委員会からナイチンゲールに、救貧院病院における貧しい病人のために看護婦を供給し、訓練し、組織する問題について提言を求められた。この件に対し返書をまとめたのが、『救貧院病院における看護』である。著作の中でナイチンゲールは、教育も受けないで医業を行ったらにせ医者と呼ぶのに、教育を受けていない看護婦をなぜ、詐欺師と呼ばないのかと述べ、病人を治療へと導いていくための最良の看護組織の探究及びそれを実現する方法の

探究が大切であるとし、今や、既に18か月間にわたってリヴァプール救貧院病院の看護を訓練看護婦の手にまかす一大実験が展開されている⁴³⁾と述べた。その一大実験が、ラズボーンの提唱によってナイチンゲールが救貧病院に送り出したアグネスの活動であった。従来からあったキリスト教的な立場からの救済は、罪からの救済と悲惨からの救済があるとした古典的な考え方をナイチンゲールは否定し、「罪を悔いる者を雇い入れるには救貧院病院は最もふさわしからぬ場である。」⁴⁴⁾と考えた。そしてナイチンゲールは、救貧院病院のような粗悪な環境に、有能な看護婦の一群を、彼女たちが自分の職務を果たすために足るだけの備えのない建物に送り込むのは大変な誤りであると述べ、「労働者を雇用する者はすべて、働く人の健康の備えをする義務がある。」⁴⁵⁾と述べた。そして、「看護婦や医師の生命が彼らの職務を果たす途上で犠牲にされても当然であるという考え方で病人の面倒を見ているような社会は、どんな社会であってももはやそれだけでその社会は病人の世話に備えることを使命としないということを十分に立証している。」⁴⁶⁾とも述べた。

彼女自身が実験であると述べたように救貧院病院に教育された看護師を派遣するといったことは新しい取り組みであり、病院看護を良くするための実験であった。従って、アグネスの活動の是非が結果を左右する。従来、貧民の為の看護を引き受けるような女性は、高齢であったり、身体が弱かったり、飲酒癖があったり、不潔であったり、無神経で不品行であったりした。ナイチンゲールは、救貧院にいる身体健全な貧民が受ける援助は、健康に生きていくために最低限必要な援助に限るという点で法律は完全に正しい⁴⁷⁾と述べ、ある階級の人々が被救済民へと堕ちていくという不偏の傾向に対しては何らかの阻止案が講じられなければならないと述べた。つまり、彼女は、老人、虚弱者、病人、強壯者、精神病患者、または子供までを同じ建物の中に詰めこんでいることについて指摘したのである。そして、病人の福祉について考慮するならば、職務を果たしている看護婦の健康に必要な設備と同じくらい、病院に必要な設備をするべきであると考えた。

ナイチンゲールは、「年老いた一人の看護婦に、この地域看護婦の在り方について発言させてもらいたい。」⁴⁸⁾と述べ、「地域看護師はいかにあるべきか」について言及した。彼女によれば「貧しい

患者について気づくことは清潔の感覚の欠如である。ナイチンゲールは地域看護師は病人の部屋を訪問した際、一度清潔にしてみせる必要があり、「看護婦が身をもって掃除をして埃を払い、ぞつとするような汚れや不決を取り除き、洗い流し、換気を消毒し、窓を擦り暖炉を掃除し」⁴⁹⁾と書いている。つまり、そこには、家庭内の不潔な環境が存在するという事であり、地域看護師はどの様にすれば患者の家庭が清潔に作りかえられるのか、身をもって実践し、それが継続できるように指導するよう求めているのである。その上で、地域看護師は患者を看護するようにその家の清潔に関心を持ち、しかも個人では解決できないような問題を関係機関に申し出、解決できるようにすることが肝要であると述べた。エンゲルスが指摘したように、不潔はロンドンのいたるところにはびこっていたという事である。

ナイチンゲールの観察によれば、病気を作り出す原因は細菌やウイルスというミクロの世界の生物という事もあるが、その微生物を繁殖させるのは不潔であり、不潔な社会環境を作り出すのは人間である。手きびしい皮肉を込めてわが農村地区の公衆衛生の機構の現実について述べるならばと前置きして、ナイチンゲールは、自分たちの無知と怠慢とが作り出している環境内で卑しくも生きていられるということ、これは毎日繰り返されている最大の奇跡であると述べたのである。著作によれば、1894年地方行政法により、衛生担当局としての貧民救済委員会の権威と義務が全て新たに組織された農村行政区の行政区評議会へと移管され、この農村行政区が農村衛生行政区を兼ねていたようだ。生体は空気を汚す根源であると述べるナイチンゲールは、空気を汚すのは人間の身体であると述べ、皮膚の清潔と身体の清潔をいかにして保つかという問題に対して洗われない身体の臭う足、恐るべき状態の髪、虫菌と菌痛である。清潔な皮膚と汚い皮膚との相違はすなわち、健康と病気との相違である⁵⁰⁾と述べた。人間がこうした環境を作り出すのは無知の成せる技であり、その無知は無学が原因であった。健康なのかそれとも病気なのか。また生きているのか死んでいるのか区別もつきにくい状況下で人々が暮らしていること、それこそがナイチンゲールには、奇跡とも呼べるほどの貧困者の実態であった。その為、ナイチンゲールは、貧困者を無知から解放し、健康と病気との相違について理解させ、自身で社会

環境を制御する方策でもって病気に打ち勝つ力を与え、自身でセルフケアできる能力を持たせるといふ一大実験の着想を持ったのである。その実験が成功をおさめ、ロンドンにおける成功はさらに、農村の公衆衛生活動へと広がった。

彼女は、新しい科学はその要求に対して造りだされてきたのに家族や学校や職場での生活の営みに関する限り、まだその Art (芸術) は造りだされていない。その芸術は世界中のどの家族にも関わりがあり、また家庭生活から発し、家族の中でのみ教えることができるものである。それが健康についての芸術 (Art) である。貧しい人も富める人も全ての人の生活習慣を健康増進へ向けさせる必要がある。人の生命に働きかけるといふことは、植物の生命でもなく動物の生命でもなく人間の力、意識を持った力で生きている人の生命である。看護師は心身ともに傷ついた生命にどのように働きかけるのか考えよう。その為に看護師は、生命の法則と健康の法則とを学ばなければならず、健康増進のための芸術 (Art) を学ばなければならない。ナイチンゲールは、「個体の健康は地域社会の健康であり、個体の健康なくして地域社会の健康はあり得ない。」⁵¹⁾と結論づけた。ナイチンゲールの思想は、クックが健全で良識の哲学であると評価したように、人々の健康問題解決の為の方策が草創期の看護教育思想であり、それは、人々の健康的な生活に必要な不可欠な原則から考え出され、社会改革を可能と為し得る革新的な人財育成プログラムである。彼女が自身の著作に引用したオーギュスト・コント⁵²⁾の、「生活は心を目覚めさせて問いを抱かせ、心は知性を目覚めさせてその問いに答えを要求する。」⁵³⁾という言葉は、自身の日常生活で観察した事実を基に探究された問題である。

4. アグネス・ジョーンズの死を悼む

ナイチンゲールとラズボーンの協同作業として、ロンドンの貧しい病人、すなわち、真の看護を必要としている人々のベットサイドに訓練された看護を提供するという国民的な事業の端緒が切って落とされた。ラズボーンの要請によってアグネスは12名の看護師を引き連れ、リヴァプールの救貧院病院に着任した。その一貫の事業の過程で起こった出来事がアグネスの死である。アグネスという女性は、聖トマス病院ナイチンゲール看護師養成学校で一番優秀な卒業生であった。最初、彼

女は女教師としての教育を受けたが、1860年にはカイゼルスウェルト学園 (Kaiserswelth) で半年間学んだ。カイゼルスウェルト学園は、1837年にテオドール・フリードナー牧師⁵⁴⁾によって設立された施設である。ドイツでは“婦人執事” (デアコネス Deaconess) という病人や貧乏な人々への奉仕活動をする婦人団体の組織があり、これに関わる女性達を教育するのがその施設の主な目的であった。ナイチンゲールが著作『カイゼルスウェルト学園によせて』⁵⁵⁾で記述している様に、自身も1850年に同学園で学んだ経験を持つ。同学園では囚人たちの更生施設としての機能も持っていたが、看護師や教師の教育も行っていた。アグネスは、カイゼルスウェルト学園で教育を受けた後、ロンドンに戻り、貧民街の救護作業に従事していた。1862年に聖トマス病院ナイチンゲール看護婦養成学校に入学した。彼女は在学中に「信頼がおける。仕事がきちょうめんで、知力・精力の要求される地位に高度の適性がある。」⁵⁶⁾と評価され、看護師の指導上、彼女の宗教的ないし徳性の影響力は貴重であるとの評価もされた。

リヴァプールの救貧院病院に赴任したアグネスを待っていたのは、救貧院院長の嘲笑と軽視、看護者たちの貪欲さや飲酒癖であった。アグネスは劣悪な環境の中で、そうした者たちと戦いながら、困難な仕事に取り組んだが、発疹チフスに感染して死亡した⁵⁷⁾。このアグネスの死を悲しんだナイチンゲールは『アグネス・ジョーンズをしのいで』⁵⁸⁾という論文を書いた。その論文の中で、ナイチンゲールは、アグネスをユーナ (Unna) と呼び、彼女の気高さを褒め称えた。ユーナというのはエドモンド・スペンサー⁵⁹⁾の『妖精の女王』⁶⁰⁾に登場するユーナ姫のことである。著作の第一巻には森の茂みから一頭のライオンが躍り上がり、ユーナ姫に襲い掛かった。が、ライオンの血に飢え、たけり狂った心は、ユーナ姫の哀れみの情でやわらげられ、輝く姫の姿に驚いて雄々しい力もうせた。“美”は最も強いものを支配し、真実は仇なす無法をも屈服させることができるとは不思議なものであると書かれている。スペンサーの著作は美への称賛がある。ナイチンゲールは、ユーナとライオンの物語をととも伝説とは思えないと書き、救貧院病院の改革に取り組んで死亡したアグネスをユーナと呼ばせていただきたいと書いた。そして、貧民をライオンに例え、ライオンを馴らすより難しい貧民がいたと述べている⁶¹⁾。貧民をライ

オンに例えたナイチンゲールには、人の生命も奪う凶暴な動物としてのイメージが貧民にはあったと考えられる。エンゲルスが指摘したように、救貧院病院内では、貧困で飢餓状況に置かれた人間が、その苦悩に耐えきれず、日常的にあたりまえに引き起こされる貧民同士での闘争や略奪、そして悪質な言動の習慣化に対する不快さがあったと考えられる。他方、アグネスをユーナ姫に例えたナイチンゲールには、スペンサーのユーナ姫に見出す表彰的な“美”とナイチンゲールがアグネスに見出す高邁な価値・信念の表出としての精神性の最も高い“美”の感情がある。

アグネスは3年足らずであったが、この世で最低の無秩序な病院集団の1つを治安当局自体が驚愕するようなキリスト教的規律にふさわしいものに変容させ、病人の福祉に関わる教区委員会や救貧法委員会の考えを改めさせた。そこには、アグネスの極限までの自身に対する訓練があったからであるとナイチンゲールは絶賛する。アグネスの活動で最も、称賛されるべきは、アグネスに内在する博愛の精神であり、その精神が“倫理”的行動の基盤になり、貧民の精神性を高め、あるべき姿に変容させたと考えられる。それはアリストテレスが述べる行為における“最高善”である。

しかるに、ナイチンゲールは、足に靴のない極貧の子供も、最も高貴な生まれの子供も、同じように仕事に就いて成功して当然であるし、事の成就を求めるならば最高の厳しい務めを耐え忍ばなければならないと述べた。最高の厳しい務めを耐え忍ばなければならないとしたら、この世にアマチュアの芸術なるものは存在しない。アマチュアの芸術が存在しないのであれば、アマチュアの看護も存在しない。ゆえに、看護もアマチュアではなく、最高の芸術であると述べたのである。そして、ナイチンゲールは、「親愛なる英国の婦人達よ、もしあなた方の中に愛する幸福な家庭を離れることに心がすすまない人がいたら、最愛の娘や姉妹を手放したくないと思う人がいたら、この神の僕にもあなた方と同じように清らかで幸福な、あらゆる創造物にもまして彼女の愛した家庭があったことを」⁶²⁾と述べ、アグネスの死を悼みつつも、婦人の使命について述べた。彼女は、「最も幸福な人々、自分の職業を最も愛する人々、自分の人生に最も感謝の念を抱いている人々、それは私の考えでは病人の看護に携わっている人々である。」⁶³⁾と述べ、後に続く者たちが、悪と罪、貧困と悲惨

に立ち向かって彼女が貫いた善き闘いを闘う意志を書きたてることができるよう頭と手と心とを働かそうではないかと述べた。結果的に、アグネスの活躍が訓練された看護師達の評価を高め、貧しい人達の病院を経て、地域看護、そして農村へと国家的単位で健康という概念と共に、地域における公衆衛生活動が進み、改革へと導いたのである。

5. 救済 (salvation)

救済とは、キリスト教であれ仏教であれ、ある対象にとって好ましくない状態を改善して望ましい状態へと変えることである。救貧院病院内におけるアグネスの看護活動は、ナイチンゲールが述べる“神の道に通ずる行い”あるいは、仏教の言う“看護即観音行”であり、ある意味、救済である。貧民救済に関する運動は博愛主義運動として知られている。博愛主義の基本的な意味は、人類への愛にもとづいて、人々の“well being”（幸福・健康・QOL等）を改善することを目的とした利他的活動や奉仕的活動、あるいは慈善的な目的を援助するために時間、労力、金銭、物品などをささげる行為のことであり、日本語では“慈善活動”“博愛”“人類愛”などとも呼んできた。それは人道主義の思想である。その思想では、人間性を尊重し、これを束縛し抑圧するものからの解放を目指す思想であり、人間性の擁護を目指した。

キリスト教国であるヨーロッパの宗教団体は、貧民保護のために犯罪者や負債を負った人々が、難を逃れる緊急避難場所的性格を持つアサイラム(Asylum)と高齢者・孤児・病人など世話が必要な人々の一時宿泊所あるいは養育院の性格のホスピタル(Hospital)という二種類の施設をつくった。中世から存在していたこのアサイラムは、18世紀末には狂気を根絶するための施設として考えられるようになった。アサイラムに狂人を収容して、治療的な側面に関わった最初の人物はウィリアム・パッティ⁶⁴⁾である。パッティは1751年の時点で、アサイラム、ロンドンの聖ルカ病院を創設した医務官である。また同時に彼は二つの大きな私立の狂人の家の所有者であり、医学専門学校の校長でもあった。パッティは治療上の長所をアサイラムに帰しており、一種の隔離療法によって患者の回復が可能であると考えた。しかし、当時、多くの精神障害者たちは救貧院に収容されていた。キリスト教的救済としての宗教的性格が強かったこれらの施策に対し、国家が介入した救貧

法では、不労生活者は犯罪者もしくはその予備軍として扱われた。救貧法が整備される前は、救貧は教会の役割であった。修道院やギルド⁶⁵⁾などでは自発的に“貧しき人々”への救済を行った。キリスト教における善行は、貧しいことは神の心にかなうこととされ、そうした人々に手を差し伸べることは善行であった。余裕のある者は、その寛大さを誇示するためにも積極的に自発的救貧を行った。また市民たちは競って貧民に文物を与え、それが市の誇りとされた。まずしい農民には安い地代で農地を提供することも多かった。16世紀になると、浮浪者の増加やギルドの支配力低下がおこり、従来の制度が崩れつつあった。

ヘンリー 8 世⁶⁶⁾の時代、浮浪貧民が生きるために盗みをはたらく例が頻発し、72,000人の貧民が死刑に処された。増え続ける貧民は社会問題として、議会でも真剣に討議された。この時国王は、こうした社会の変化に対応するために貧民を、病気等のために働けない者と怠惰ゆえに働かない者に分類し、前者には物乞いの許可をくだし、後者には鞭打ちの刑を加えることとした。労働不能貧民には衣食の提供を行う一方、健全者には強制労働を課した。この救貧法は現代社会福祉制度の出発点と評価されたが、法の目的は救済ではなくあくまで治安維持にあった。したがって貧民の待遇は抑圧的でありつづけ、ときには健全者と病気を持つ者とを区別しないで収容し、孤児院内で病気の感染もおこった。こうした待遇から脱走や労働拒否を試みる貧民はあとを絶たず、一定の社会的安定をもたらす効果はあったものの、根治には至らなかった。19世紀に入って自由主義思想が主流になると、救貧制度にも影響を及ぼした。ギルバート法⁶⁷⁾・スピーナムランド制度⁶⁸⁾への批判やトマス・ロバート・マルサス⁶⁹⁾などの思想的背景から、福祉費用は削減される方向へ向かった。そして1834年に新救貧法が成立し、救貧税を劇的に抑制することに成功した。そして、この法律改訂以降孤児院は史上最悪の環境となった。チャールズ・ディケンズ⁷⁰⁾は救貧院の惨い取り扱いに対し『オリバー・ツイスト』⁷¹⁾で痛烈に批判した。

新救貧法成立当時は、救貧法に甘える貧民たちに対する反感が勝っていた。マルサスは、著『人口論』⁷²⁾で、人口の原理で、第一に生活資源が人類の生存に必要なものであるという事と、第二に異性間の情欲は必ず存在するという事を基本原理しながら、人口の飛躍的な増加に対する制限が、どの

ような結果をもたらすかについて論じた。動植物については本能に従って繁殖し、生活資源を超過する余分な個体は場所や養分の不足から死滅していく。人間の場合には動植物のような本能による動機づけに加えて、理性による行動の制御を考慮しなければならない。つまり経済状況に応じて人間はさまざまな種類の困難を予測していると考えられる。このような考慮は常に人口増を制限するが、それでも常に人口増の努力は継続されるために人口と生活資源の不均衡もまた継続されることになる。人口増の制限は人口の現状維持であり、人口の超過分の調整ではない。人口増の継続は生活資源の継続的な不足をもたらし、重大な貧困問題に直面することになるとマルサスは指摘したのである。これに反してフリードリッヒ・エンゲルス⁷³⁾は、『イギリスにおける労働者階級の状態』⁷⁴⁾で、マルサスの主張を一部容認しつつも、労働者の有産階級による奴隷状態が闘争を招く⁷⁵⁾と述べ、その闘争の結果、両者の敵対関係を生み出すと同時に労働者間の対立を引き起こすとの見解を示した。おりしもロバート・オーウェン⁷⁶⁾など社会主義思想の影響によって1830年ごろからチャーチスト運動⁷⁷⁾が展開され、拡大しつつあった。彼らの主張は教育が極めて重要であること、それを慈善でなく、権利として公的に拡充することが必要であるとのことであり、政治的活動に発展していた。結局、新救貧法は、イギリス全土におよぶ貧民・労働者の暴動という事態を招き、資本家と労働者の対立を激化させた。

6. イギリス労働者階級の貧困と健康問題

エンゲルスの著作『イギリスにおける労働者階級の状態』は、自己の観察に基づいて綿密に書かれた社会告発文である。彼は一部の貪欲な資本家のあくなき利潤追及のために、いかに労働者が過酷な状況に置かれていたかを、多くのケースを紹介しながら辛辣に批判した。彼等の住まう住居の劣悪さ、貰っている賃金の低さ、着替える服もなく汚れた体を洗う水もなく、食べ物を買うに十分なお金もなく、一度たりとも満腹感を感じるほど食べたこともなく、子供達は十分に保護もされないで栄養障害で成長障害を起こし、骨は曲り、病死や事故死で死亡する事が多かった。エンゲルスは「イギリスの大都市ほど多くの子供が車に轢かれたり、馬蹄で蹴り上げられたりするところはないし、又、溺死したり、焼死したりするところは

ない。』⁷⁸⁾と述べ、その公衆衛生の悪さを次のように表現している。

「病院ばかりでなく一般の住環境でさえ、小屋は小さくて、不潔であり、最も小さい種類のものである。街路は平らでなく、でこぼこで、一部は舗装されていないし、廃水口もない。おびただしい汚物、廃物、胸のむかつくような糞便が、澱んだ水溜まりの至るところに散在している。あたりの空気は、これらの発散するガスによって汚染され、一ダースもの工場の煙突から出る煤煙によって曇らされ、重苦しくされている。たくさんのボロを着た子供や女が、まるでゴミの山や水たまりの中でいい気になっている豚と同じように汚らしく、このあたりをうろついている。簡単にいえばこの巢窟全体が、アーク河に沿った最悪の囲い地でもなかなか及ばないほど不快で、嫌悪すべき光景を呈しているのである。この荒れ果てた小屋の中に住み、こわれた防水布を張り付けた窓や、割れ目のはいったドアや、腐れ落ちかかった入り口の柱の後に、あるいは更に暗くてじめじめした地下室の中に、この故意とも見えるような閉じ込められた空気の中のこの限りない不潔と悪臭の間に、生きている種族、この種族こそ実際に、人類の最も低い段階にあるものに違いない」⁷⁹⁾

続けてエンゲルスは「どちらを向いてもいたるところに我々は永続的あるいは一時的な貧困をこうした状態あるいは労働から派生する病気を、墮落を見出だす。至るところに肉体と精神の両面に渡る人間性の破壊を、緩やかではあるが確実な人間性の喪失を見いだす。」⁸⁰⁾と述べた。これらは、ロンドンに住まう人々の劣悪な生活環境、あるいはそれを提供している資本家の、あるいは行政関係者の公衆衛生概念の欠如を意味している。この様に当時の多くの労働者が最悪の生活環境の中で、長時間に及ぶ労働にも関わらず賃金は低く、貧困の中で栄養失調となって、生命は蝕まれ、子供達は饑餓状態で放置された。カール・マルクス⁸¹⁾も工場労働者の状況と工場環境の悪さを指摘した。1867年に著した『資本論』⁸²⁾の中でマルクスは、機械が従来必要としていた筋力を不要にし、代わりに機械は筋力のない労働者、即ち、婦人および児童をその筋力労働の代用物にし、たちまち、性や年齢の区別なく資本者側の直接的統治に編入させた⁸³⁾と述べた。その上、この労働は機械を休ませない為に昼間労働、夜間労働の交替制を取っていたから、12時間から18時間という長時間の労働

が課せられ、労働者達は“白色奴隷”と命名される程の状況下で、事実上、死ぬまで働かされた。過度の労働に加え、工場の内部は換気が悪く日もささず、食事も満足でなくほとんどのものが栄養失調となり、多くの者が健康を害した。自己の工場経営の傍ら、労働者の状態改善に努めていたオーウェンは、働く母親の為に工場内に保育施設を設け、ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチ⁸⁴⁾の教育精神によって幼児教育を開始した。又、オーウェンは“工場法”の成立にも奔走した人物である。彼は、社会の正しい目的は、人間の肉体的・道徳的・知的な性格の改善にある⁸⁵⁾と考えていた。その性格改善は経験する苦痛を最小に、よこびを最大にする最も良い方法で行うべきであった。しかし、彼の見解では社会の現在の仕組みはそのようにはなっていないし、労働者たちは将来の見通しもなく、不健康で気の進まない労働に従事しながら、生活必需品のほとんどが入手できない状況にあった。

ナイチンゲールが後に、「すし詰め工場や学校」⁸⁶⁾と記述している様に、おおよそ、一般大衆が集まるような場所は公衆衛生が悪く、人々の健康に重大な障害を与えていた。“新鮮な空気”の不足がいかにか身体の健全性を阻害するか。ナイチンゲールは、工場や作業所で働く人々の健康問題に対して何の配慮もされておらず、貧しい労働者たちは過密状態で無理な姿勢、運動不足、短い食事時間と栄養不足、長時間に及ぶ過酷な労働と不潔な空気といった中で、安い賃金と引き換えに「労働と健康と、そして生命を提供しなければならない。」⁸⁷⁾と述べた。こうした工場内の環境下では胸部疾患や肺結核が蔓延し、若者の生命が奪われた。劣悪な環境下で伝染病等が流行しようものならひとたまりもなかった。まさしく、それは、人権に関わる問題であり、イギリス社会の労働者階級の劣悪な状況を改善する必要があった。公衆衛生や健康の概念を主眼として社会改革を行ったまさに筆者が『ナイチンゲール—社会組織改革に見る国家の責務—汝自身を知れという言葉は国家にもあてはまる—』⁸⁸⁾で報告したように、国民の健康問題という点では、自己を知れという言葉は国家にも当てはまったのである。貧困・無知・病気といった社会悪への手当には、人間の病気同様、まさに現実的な対応が必要であった。

1840年にナイチンゲールは隣人であるヘンリー・ジョン・テンプル・パーマストン卿⁸⁹⁾宅

に招かれた時、アンソニー・アシュレイ卿⁹⁰⁾から、貧しい人々の状況を改善・改良するために自分の全生涯をかけていることを聞いた。彼の影響を受けたナイチンゲールは自分も何か社会に役立つことはないのかと考えるようになった。アシュレイ卿という人は炭鉱に調査団を送り、1842年に“炭鉱法”を成立させた事でも有名である。イギリスでは、1833年に人道主義的な見地から児童の長時間労働を制限したが、1847年に成立した“10時間労働法案”は婦人にもその枠が拡大された。1844年にアシュレイ卿が下院で演説した“10時間工場法案”は、マルクスの『資本論』にも引用されている。また、ナイチンゲールも自身の生地であるイタリアを訪れた若かりし時にも強烈な体験をした。それは、ジーン・チャールズ・レオナルド・シモンディ・シスモンディ⁹¹⁾家を訪問した時である。シスモンディ家から見える窓の外には常に300人ほどの乞食の群れがいた。彼からイタリアの歴史や経済学や政体論の話や貧民救済の為に全生涯をかけていることを聞いたナイチンゲールは、自己の崇高な目的のために犠牲を惜しまないシスモンディの姿に崇拜の念と強烈な印象を抱いた⁹²⁾。ナイチンゲールにとって貧民救済の為に全生涯をかけている人々は、自己の理想を貫く為の理想的なモデルであった。自身も社会で役に立ちたいと考えるようになったのは極、自然な成り行きであったろう。

7. ナイチンゲール地域福祉への貢献

地域福祉の概念が、人々が日常生活を幸福に生きること、よく生きる為には健康であることが重要であるという事等を考えた場合、ナイチンゲールには、人間の福祉に関する本質探究に基づく哲学がある。つまり、彼女の人々の健康についての働きかけは、人々の幸福追求に寄与する活動、すなわち、人権思想に根差した地域福祉貢献活動である。地域で生活する全ての人々が、自然法の中で、生まれ持っている権利の行使が自由にできること、全てにおいて平等である事、そして、その与えられた人生を良く生きることが幸福であるとの考えで一致するとしたら、幸福な人生は誰にも与えられた権利である。その幸福な人生を生きるためには健康である事が求められる。そうした見解を最初に示したアリストテレスの弁によれば、人間が行う活動の目的には幸福があり、幸福な生活のためには、人間が良く生きることであり、良

く生きる為には健康が重要である。つまり、幸福であるということは健康であることに他ならず、医療のみならず、人々の健康維持に関わる全てのことは、地域福祉への貢献になり得る。

そして、近年になって健康を一般に心身の要求が満たされた状態として説明するアブラハム・ハロルド・マズロー⁹³⁾も、幸福とは健康であると捉えている。マズローの健康に関する考え方は、人間の本性は基本的に善であるという考えからの着想である。この本性は、人間が生存のために持つ欲求であるから悪いことではない。ゆえに基本的に善であるとの事である。従って、この本性に逆らえば病気になるとのことである。病的な文化が病的な人間を作り、健康な文化が健康な人々を作る。個人の健康の改善は、良い世界を作る第一歩である。そして“健康な悩み”との関係で人格の問題を取り上げている。この人格の問題は明らかにその職務を遂行しているから精神的本性の圧服であり、人々はこれを甘んじて受け、本当の幸福、本当の有意ある前途の達成、豊かな情緒的生活、等の実りの多い生活をつかみ損なっている。創造的で美的に生き、人生に感動を覚えることがどれほど素晴らしいかを知らずにいる⁹⁴⁾。そして、“善きもの”“善きことがら”を追求するためには、正しい行動が重要である。その為にまず、基本となるのが生理的欲求 (Physiological needs) である。これは生命維持のための食事・睡眠・排泄等の本能的・根源的な欲求である。極端なまでに生活のあらゆるものを失った人間にとっては、生理的欲求が他のどの欲求よりも最も主要な動機づけとなる。人間にとってこの欲求しか見られないほどの状況は一般的ではないため、通常健康な人間は即座に次のレベルである安全の欲求が出現する。安全の欲求 (Safety needs) は、安全性・経済的安定性・良い健康状態の維持・良いく暮らしの水準、事故防止、保障の強固さなど、予測可能で秩序だった状態を得ようとする欲求である。次に、社会的欲求と愛の欲求 (Social needs / Love and belonging) がある。生理的欲求と安全欲求が十分に満たされると自分が社会に必要とされている、果たせる社会的役割があるという感覚の欲求が現れる。情緒的な人間関係・他者に受け入れられている、どこかに所属しているという感覚も同様である。そして、この欲求が満たされると、かつて飢餓状態に置かれていた時には欲することのなかった愛を求め、今や孤独・追放・拒否・無

縁状態であることに痛恨をひどく感じるようになる。不適応や重度の病理、孤独感や社会的不安は、鬱状態になる原因の最たるものである。承認（尊重）の欲求（Esteem）は、自分が集団から認められ、尊重されることを求める欲求である。低いレベルの尊重欲求は、他者からの尊敬、地位への渴望、名声、利権、注目などを得ることによって満たすことができる。最後に自己実現の欲求（Self-Actualization）がある。それは、自分の持つ能力や可能性を最大限発揮し、具現化して自分になりえるものにならなければならないという欲求であり、ナイチンゲールが求めてやまない欲求である。マズローによれば、すべての行動の動機がこの欲求に帰結されるようになる。彼の、マズローの欲求階層論は、その欠乏が病気を招くという問題であり、そこには基本的に人間が生命を維持するために必要な原則と人生における健康的な生活を維持するための着想がある⁹⁵⁾。

ナイチンゲールの時代、健康を科学的に捉え、その概念を早期に教育する必要があると述べたのはハーバート・スペンサー⁹⁶⁾である。彼は、ヴィクトリア朝中期のチャールズ・ダーウィン⁹⁷⁾と共に代表的な科学者である。彼の思想は『科学の起源』⁹⁸⁾、『進歩について—その法則と原因』⁹⁹⁾、『知識の価値—教育論第一部』¹⁰⁰⁾などに明確である。彼は目的論的に言えば自然が健康のために有効な安全装置を与えてくれたのに、知識不足がこの安全装置の大半を無駄にしていると述べ、たくましい体力とそれに伴う元気とは、幸福の最大の要素であるから、その保ち方の教育こそ他の一切に勝る重要な教育となろう¹⁰¹⁾と述べている。その上で、スペンサーは生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するに必要な生理学のコースこそ、合理的教育の最も基礎的な部分であると述べた。スペンサーが述べたがごとく、人々の幸福を求める欲望を考えた場合、健康を維持する為の一般的基礎知識、すなわち、生理学の一般真理と、日常行為との関係を理解するに最も基礎的な教育が必要であった。日常生活と生理学、それこそがナイチンゲールが看護教育で示した教育内容である。つまりは、人々が健康を維持する為に自らが健康を維持する為の行動を起こすという事である。それは、人として日常生活を良く生きられるという事である。

ヒルティが人間だれ一人として幸福を求めないものはないがしかし、誰ひとり、その幸福の内容

について共通した考えはないと述べたように、人間が本質的に幸福を求める欲望が存在することは確かである。人生の目標や活動の充実に幸福を求めるとか、幸福を来世に求めるとか、富や名声に幸福を求めるとか、力、健康、個人的権力に幸福を求めるとか言った場合には、やはり個人的には幾分か欠乏が存在するから求めるのであって、それらを有している者は幸福であると実感しないのが通常である。この世の中で、最も健康な生活は絶えず、心身の安寧を計り、有益な仕事をしながら、自分の能力の範囲内で落ち着いた仕事に従事する事である。つまりは、絶え間ない有益な活動の状態こそが、この地上の最上の幸福な状態であり、その有益な活動ができるように個々の健康を維持・増進する活動こそが地域福祉に貢献することにつながると言えよう。

■ おわりに

本論では、ナイチンゲールが著した『アグネス・ジョーンズの死をしのいで』にヒントを得て、イギリス国家の貧困対策問題に言及し、地域福祉という一般概念、人権思想と地域福祉、イギリス社会における社会的問題と弱者救済活動及び救済の為の制度、そして、ナイチンゲールの地域福祉への貢献活動について論究した。

地域福祉の考えは人々の幸福追求の自由と平等思想に立脚しており、人間が生まれながらに有している基本的人権思想である。そこには、国民の生存権を保障する為、貧困者や保護を必要とする児童・母子家庭・高齢者・身体障害者等の社会的弱者に対して援護・育成・更生を図ろうとする公私の社会的努力を組織的に行おうとする努力がある。福祉の基本理念が自由・平等・健康・幸福の追求にあるとしたら、人々が暮らす日常生活においてこれが実現されなければならない。かつてのように社会が支配者によって支配され、自由が拘束され、奴隷状態であったとしたら、それは人間の幸福からはほど遠い。貧困・無知・病気は社会悪の根源である。その社会悪の改善には多くの思想家たちとその実績が残されている。貧困者救済活動、19世紀は女性の世紀の言葉に始まる男女間の不平等改善のための女性の権利運動、20世紀は子どもの世紀で始まる子供の健全育成、社会における精神障害者の取り扱いに関する運動等は、個別と言うよりも、それぞれが相互に重なり合う公

共の福祉，すなわち，社会集団に対する福祉思想の実現である。ナイチンゲールの地域福祉に向けた取り組みは，人々の健康という概念を軸としながら，全ての人の幸福実現に向けた取り組みであり，弱者救済活動である。

イングランド救貧法は近代的社会福祉制度の先駆として模範のひとつとされ，諸外国も福祉制度の導入にあたって参考にした。日本の生活保護法などもこの影響を受けて作られている。我が国の基本的姿勢として示されている日本国憲法の基本理念は，国民主権 (Popular Sovereignty) である。国民主権，すなわち，主権在民の思想は，憲法に盛り込まれ，特に，個人の尊厳については，すべて国民は，個人として尊重され，生命，自由及び幸福追求に対する国民の権利については，公共の福祉に反しない限り，立法その他の国政の上で，最大の尊重を必要とするという条文がある（第13条）。ホブズが述べたがごとく，自然は心身の諸能力において平等に作ったのであるから，人々は生まれながらにして平等であるということである。そして，各人が彼自身の力を使用することは各人の自由であり，彼自身の判断力と理性において，彼がそれに対する最適の手段と判断した全てのことを行う自由があるということである。しかし，個人の自由は，そこに存在する誰もが有している自由であり，一方の自由の行使と他方の自由とが必ずしも一致するとは限らない。そこに公共

の福祉という概念が求められる。そして，それは憲法25条の条文でも同様であり，すべて国民は，健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有するという条項と，国民に対する責務については，すべての生活部面について，社会福祉，社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならないという条項が，国民の生命と健康を守る施策の一環として実施されるものである。特に弱者保護の立場から生活保護法，児童福祉法，老人福祉法，身体障害者福祉法，精神障害者福祉法などが規定され，国民全ての福祉に対する国または地方公共団体などが行うものと社会福祉事業法により設立された社会福祉法人などが行政として実施されている。健康という概念が人々の幸福につながっているという点で社会福祉の推進は，権利主体としての国民全ての共通課題であるが，とりわけ，健康課題を有している人々の健康の回復・増進・維持向上に向けて直接患者のケアに従事する医療者にとって重要である。さらに，さまざまな健康問題を有している者のQOL推進は，医療と社会福祉事業との連携で促進できるものである。

専門職者は，医療・福祉・教育の協働という言葉の意味を，ナイチンゲールが実施した看護教育にたち戻り，日常である看護実践のその仕事の向こうには国民の幸福追求の為の健康問題があり，その解決こそが地域貢献であると考えていくべきであろう。

注

- 1) エドワード・クック (Edward Tyas Cook 1857-1919); イギリスのジャーナリストであり歴史家でもある。オックスフォード大学卒。
- 2) Sir Edward Cook; The Life of Florence Nightingale, (中村妙子他訳; ナイチンゲール [その生涯と思想 I], p178, 時空出版, 1993年.)
- 3) アグネス・ジョーンズ (Agnes Jones 1832-1868); ジョン・ロレンス卿 (Sir John Lawrence 1811-1879 イギリスの政治家・貴族。1864-1869年にインド総督を務めた。) の姪。彼女は美貌と情熱的な愛他精神と妥協を許さぬ道徳的潔癖さを受け継いでいた。聖トマス病院のナイチンゲール看護師養成学校で一年間学んだ。彼女はナイチンゲールの最優秀にして最愛の生徒であった。
- 4) Florence Nightingale (1871); Introduction by Florence Nightingale [In] Memorials of Elizabeth Jones, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, アグネス・ジョーンズをしのいで, p246, 現代社, 1985年.)
- 5) マルクス・トゥッリウス・キケロ (Marcus Tullius Cicero 6-43 BC); 共和政ローマ帝国末の政治家・文筆家・哲学者。ラテン語でギリシア哲学をローマに導入し，プラトン (Plato 紀元前427-347年 古代ギリシアの哲学者。) の教えに従う懐疑主義的な新アカデメイア学派から出発しつつ，アリストテレス (注27参照) の教えに従う古アカデメイア学派の弁論術，修辞学を評価して自身が最も真実に近いと考える論証や学説を述べ，ジョン・ロック (注30) 参照)，デヴィッド・ヒューム (注15) 参

- 照), モンテスキュー ((Charles-Louis de Montesquieu 1689-1755 フランスの哲学者) 等に多大な影響を与えた。
- 6) ウィリアム・ラズボーン (William Rathbone 1819-1902); リヴァプールの商人と船主たちの間に代々君臨してきた一族の長男。一族が組織する会社の筆頭の地位にあり, 博愛と自由主義精神の伝統を受け継いだクエーカー教徒。祖父は奴隷廃止論者。
 - 7) Florence Nightingale (1871); 前掲書4), p243.
 - 8) Florence Nightingale (1882); Nurses, Training of, and Nursing the Sick, (湯模ます他訳; ナイチンゲール著作集第二巻, 看護師の訓練と病人の看護, p95, 現代社, 1985年.)
 - 9) 加藤洋子・工藤隆二・村上須賀子編, 佐々木秀美著; 現代社会と福祉, 第六章社会福祉の源流, pp136-152, ふくろう出版, 2016年.
 - 10) ジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873) イギリスの哲学者, 経済学者. ジェームズ・ミル (James Mill 1773-1836 イギリス・スコットランドの歴史家・哲学者・経済学者) の息子. ベンサム (注16) 参照) の助言に基づき父ジェームズによって早期教育を受ける。『経済学原論』や『自由論』を書いて, 私有財産制や経済的自由を擁護しつつもその限界を認め, また自由を経済的自由からよりも精神的自由から根拠付けて, 自由主義に新しい展開を与えた。
 - 11) トーマス・ヒル・グリーン (Thomas Hill Green 1836-1882); イギリスの哲学者. 自由主義者として政治活動にも関与し, その関心は倫理学だけでなく, 政治哲学や教育にも及んだ。
 - 12) ジョン・スチュワート・ミル (1859), 塩尻公明・木村健康; 自由論, p113, 岩波文庫, 1993年.
 - 13) クリステリアン・ヴォルフ (Christian Wolff 1679-1754); ドイツの哲学教師. ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz 1646-1716 ドイツの哲学者・数学者) からカント (注14参照) への橋渡しの存在. 最初に神学を学び, イエーナ大学・ライプツィヒ大学で哲学と数学を修め, 1704年からライプニッツと交わり, その推薦で1707年にハレ大学の数学・自然学教授. 1709に哲学教授となる。
 - 14) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804); ドイツの哲学者. ケーニヒスベルクに生まれる. 同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ. 後, 1746年 (延享3年) にケーニヒスベルク大学の私講師になり, 1755年に同大学の論理学・形而上学の正教授となる。
 - 15) デヴィッド・ヒューム (David Hume 1711-1776); スコットランドエディンバラ出身の哲学者. イギリス経験論を代表する思想家であり歴史学者・政治哲学者。
 - 16) ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham 1748-1832); イギリスの哲学者・法学者・社会改革家である. 最も有名な功利主義者である. 彼はあらゆる行為と立法の適切な目的は“最大多数の最大幸福である”と説いた. 1792年にフランス共和国名誉市民になり多数の著書を発刊して経済・政治を説いた。
 - 17) J・R. デインウィディ著, 永井義雄訳; ベンサム, pp80-81, 日本経済新聞社, 1993年.
 - 18) J・R. デインウィディ著, 永井義雄訳; 前掲書17), pp40-41.
 - 19) J・R. デインウィディ著, 永井義雄訳; 前掲書17), p46.
 - 20) ナイチンゲール氏 (William Edward Nightingale 1794-1874); ナイチンゲールの父親, ケンブリッジ大学を卒業. 国会議員を目指したが落選. 地方貴族としての役割を果たしながら子供達の教育に専念した。
 - 21) バートランド・アーサー・ウィリアム・ラッセル (Bertrand Arthur William Russell 1872-1970); イギリスの哲学者, 論理学者, 数学者, 貴族. イギリスの首相を2度務めた初代ラッセル伯は祖父である. 名付け親の哲学者のミル (注10) 参照) はラッセル誕生の翌年に死去したが, その著作はラッセルの生涯に大きな影響を与えた。
 - 22) カール・ヒルティ (Carl Hilty 1833-1909); スイスの法学者, 哲学者, 政治家. 日本では『幸福論』, 『眠られぬ夜のために』の著者として知られる. 敬虔なクリスチャンで人生, 人間, 神, 愛, 死などの主題を持った思想書を著した。
 - 23) バートランド・アーサー・ウィリアム・ラッセル著, 安藤貞雄訳; ラッセル幸福論, p11, 岩波文庫, 2014年.

- 24) ヒルティ著, 草間平作他訳; 幸福論 (第三部), p46, 岩波文庫, 1999年.
- 25) ヒルティ著, 草間平作他訳; 幸福論 (第一部), p16, 岩波文庫, 2014年.
- 26) ヒルティ著, 草間平作他訳; 前掲書25), p207.
- 27) アリストテレス (Aristoteles 紀元前384-322); 古代ギリシアの哲学者. 名前の由来はギリシア語の aristos (最高の) と telos (目的) からであるとされる. プラトンの弟子であり, ソクラテス (Sôkratês 紀元前469-399 ギリシアの哲学者)・プラトン (注5) 参照) とともに西洋最大の哲学者の一人とされ, その多岐にわたる自然研究の業績から「万学の祖」とも呼ばれる. イスラム哲学や中世スコラ学, 更には近代哲学・論理学に多大な影響を与えた.
- 28) アリストテレス著, 高田三郎訳; ニコマコス倫理学上下, 岩波文庫, 2015年.
- 29) トマス・ホブズ (Thomas Hobbes 1588-1679); イングランドの哲学者. 17世紀の近世哲学にあって, 機械論的世界観の先駆的哲学者. 唯物論の先駆的思索を行った哲学者の一人.
- 30) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704); イギリス経験論の代表的哲学者. 近代民主主義の代表的思想家の1人. イギリスの名誉革命, アメリカの独立宣言は彼の政治思想の直接的具体化である.
- 31) ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau 1712-1778); フランス啓蒙期の天才思想家. 彼の活動はきわめて多面的で, その主権在民, 自由平等, 愛国などの思想がアメリカ独立やフランス革命に理論的基礎を与えたのみでなく, 社会主義, 人格主義, 永久平和の理想, ヒューマニズム教育, ロマン主義など, 近代を形成する先駆者である. 人間の自然の善性を原理に教育は宝の詰め込み出なく, ただ被教育者の自然的能力の開花を妨げるべきものの除去を目標とする「消極教育」を主張した. 知的早期教育の否定, 徳育と体育の重視, 実物教育, 教育の手段化に反対してまず人間たれと説くこと, など教育学上画期的な見解を示し, カント (注14) にも大きな影響を与えた.
- 32) ルソー (1762), 桑原武夫訳; 社会契約論, 岩波文庫, 1991年.
- 33) ルソー (1762), 桑原武夫訳; 前掲書32), p54.
- 34) ルソー (1755), 本田喜代治, 平岡昇訳; 人間不平等起源論, 岩波文庫, 1992年.
- 35) ルソー (1755), 本田喜代治, 平岡昇訳; 前掲書34), p36.
- 36) ルソー (1755), 本田喜代治, 平岡昇訳; 前掲書34), p47.
- 37) Florence Nightingale (1894); Health Teaching in Town and Villages. Rural Hygiene, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第二巻, 町や村での健康教育, p159, 現代社, 1983年.)
- 38) Florence Nightingale (1894); 前掲書37).
- 39) Florence Nightingale (1867); Suggestions on the Subject of Providing, Training, and Organizing Nurses for the Sick Poor in Workhouse Infirmaries, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第二巻, 救貧院病院における看護, 現代社, 1985年.)
- 40) Florence Nightingale (1876); Metropolitan and National Nursing Association for Providing Trained Nurses for the Sick Poor, (湯槇ます訳; 貧しい病人のための看護, ナイチンゲール著作集第二巻, 現代社, 1985年.)
- 41) Florence Nightingale (1874); Life or death in India, (湯槇ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, インドにおける生と死, 現代社, 1983年.)
- 42) Florence Nightingale (1863), Note on Hospital, (湯槇ます訳; 病院覚え書, ナイチンゲール著作集, 第三巻, 現代社, 1985年.)
- 43) Florence Nightingale (1867); 前掲書39), p3.
- 44) Florence Nightingale (1867); 前掲書39), p17.
- 45) Florence Nightingale (1867); 前掲書39), p35.
- 46) Florence Nightingale (1867); 前掲書39), p35.
- 47) Florence Nightingale (1867); 前掲書39), p21.
- 48) Florence Nightingale (1876); 前掲書40), p54.
- 49) Florence Nightingale (1876); 前掲書40), p55.
- 50) Florence Nightingale (1894); 前掲書37), p171.

- 51) Florence Nightingale (1876); 前掲書40), p142.
- 52) オーギュスト・コント (Auguste Comte 1798-1857); フランスの哲学者, 社会学者, 実証主義の始祖. サン・シモン (Claude Henri de Rouvroy, Comte de Saint-Simon 1760-1825 フランスの社会主義思想家) の弟子. 彼は, 全ての科学は神学的段階から形而上学的段階を経て, 実証的あるいは経験的段階にいたったものとみなし, 実証的宗教においては, 崇敬の対象は人間性であり, その目的は人類の幸福と進歩にあるとした.
- 53) Florence Nightingale (1888); To the nurses and probationers trained under the “Nightingale Fund”, (湯慎ます他訳; ナイチンゲール著作集第三巻, 看護師と見習い生への書簡, p176, 現代社, 1985年.)
- 54) テオドール・フリードナー (Pastor Theodor Fliedner 1800-1864); プロテスタントの牧師. ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に, 人々が経済的に苦境に陥っていたため, 救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした. そこでエリザベス・フライ女史の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした. その一環として1836年に看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルト学園を創立した.
- 55) Florence Nightingale (1851); The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯慎ます他訳; ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, pp3-4, 現代社, 1983年.)
- 56) ザカリイ・コープ著, 小池明子他訳; ナイチンゲールと医師達, 日本看護師協会出版会, pp4-5, 1979年.
- 57) ザカリイ・コープ著, 三和卓爾訳; 前掲書56), p13.
- 58) Florence Nightingale (1871); 前掲書4), p24.
- 59) エドモンド・スペンサー (Edmund Spenser 1552-1597); イングランドの詩人で, エリザベス1世の時代に活躍した. アイルランドに赴任していた時に反イングランド暴動に遭遇した. 1590年に代表作『妖精の女王』を書いた.
- 60) 早乙女忠; 象徴の騎士たちスペンサー『妖精の女王』を読む, 松柏社, 2001年
- 61) Florence Nightingale (1871); 前掲書4), p244.
- 62) Florence Nightingale (1871); 前掲書4), p248.
- 63) Florence Nightingale (1871); 前掲書4), p256.
- 64) ウィリアム・バッティ (William Battie 1703-1776); アサイラム, ロンドンの聖ルカ病院を創設した医務官. 私立の狂人の家の所有者であり精神科医. 医学専門学校の校長.
- 65) ギルド (Guild); 中世より近世にかけて西欧諸都市において商工業者の中で結成された各種の職業別組合. 一般に封建制における産物とされる.
- 66) ヘンリー8世 ((Henry VIII 1491-1547); チューダー朝第二代のイングランドの王. (在位1509-1547), 後にアイルランド王 (1541-1547). ローマカトリック教会からイングランド国教会の分離によってローマと対立, 修道院を解散, 自ら国教会の首長となったことで有名.
- 67) ギルバート法 (Gilbert's Act); 18世紀末のイギリス経済の長期にわたる好況, 小麦価格の安定, 労働者階級の生活水準の上昇という社会的な状況を背景にイギリス救貧法の人道主義化を確認した1782年法の一般的呼称. 提案者であるトマス・ギルバート (Thomas Gilbert 1720-1798) の名に由来する.
- 68) スピーナムランド制度 (Speenhamland system); 1795年に貧民救済のために定められたイギリスの法律. 低所得者・失業者に対しての賃金補助制度が確立し, 貧民への最低生活が保障された.
- 69) トマス・ロバート・マルサス (Thomas Robert Malthus 1766-1834); イングランドの経済学者古典派経済学 (1870年以降の経済学と分けて考えられている) を代表する経済学者で過少消費説, 有効需要論 (Effective demand 経済全体の有効需要の大きさが国民所得や雇用量など, 一国の経済活動の水準を決定するという原理) を唱えた人物.
- 70) チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens 1812-1870); イギリスの小説家. 法律事務所の下働き後

に民法博士会館の議事速記者になり、22歳でロンドンの新聞記者になる。彼は小説中に多彩な人物を登場させ、その当時の社会悪を激しく批判した。小説『マーティン・チャズルウィット』ではギャング婦人という卑しい女性を登場させ、病院看護の実態を批判した。

- 71) Charles Dickens; OLIVER TWIST, ladybird Books Loughborough.
- 72) トマス・ロバート・マルサス (1798), 永井義雄訳; 人口論, 中央公論新社, 2009年.
- 73) フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895); ドイツの社会主義者.
- 74) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; イギリスにおける労働者階級の状態, 大月書店, 1992年.
- 75) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; 前掲書74), p178.
- 76) ロバート・オーウェン (Robert Owen 1771-1858); イギリスの近代社会主義の創始者. 学歴は小学校程度であるが, 彼の経営するスコットランド, ニュー・ラナーク紡績工場における「性格形成学院」の実践は, 直観教授などの進歩的方式を採用し, 世界最初の幼稚園と言われた.
- 77) チャーティスト運動 (Chartist Movement); ロンドン労働者協会のラベット (William Lovett 1800-1877) を中心に政治的運動を展開し, 人民自ら自己教育のための学校施設を建設するべきであると主張した. 彼らの主張は基本的に民衆教育とその制度的確立である. 『イギリス公教育の歴史的構造』より.
- 78) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; 前掲書74), p222.
- 79) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; 前掲書74), p146.
- 80) エンゲルス著, 全集刊行委員会訳; 前掲書74), pp126-127.
- 81) カール・マルクス (Karl Heinrich Marx 1813-1883); 国際的共産主義の祖. ボン大学とベルリン大学で法律を学んだ. 1848年に共産党宣言を完成させ, その中で国家は抑圧の道具であり, 宗教や文化は資本家階級のイデオロギーだと攻撃した. 1849年にロンドンに落ち着いてから経済学を研究し, 『資本論』を書いた.
- 82) カール・マルクス著, 長谷部文雄訳; 資本論, 河出書房, 1970年.
- 83) カール・マルクス著, 長谷部文雄訳; 前掲書82), p362.
- 84) ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827); 哲学者としてまた, 教育思想家でもあり, 貧民教育の実践者としても有名である.
- 85) 五島茂他編; 世界の名著42, オウエン サン・シモン フーリエ, p201, 中央公論社, 1996年.
- 86) Florence Nightingale (1860); Note on Nursing, Scutari Press, 1992.
- 87) Florence Nightingale (1860); 前掲書86), p26
- 88) 佐々木秀美著; ナイチンゲール—社会組織改革に見る国家の責務—汝自身を知れという言葉は国家にもあてはまる—, 看護学統合研究 Vol.16, No.1, pp35-56, 2014年.
- 89) ヘンリー・ジョン・テンプル・パーマストン (Henry John Temple Palmerston 1784-1865); 英国の政治家. 彼は英国外交政策を30年間にわたって支配し, 1855-1858年, 1859-1865年の間自由党内閣の首相.
- 90) アンソニー・アシュレイ・クーパー卿 (Lord Anthony Ashley Cooper 7th earl Shaftsbury 1801-1885); オックスフォード大学に学び, 1826年に国会議員となり, 工場改革運動の中心的人物となる. 継続的な工場関係法案 (1847. 1859) の議会通過に尽力し, 鉱の労働条件を規制し (1842), 労働者に宿泊所を提供した (1851). イギリス国教会内の福音主義運動の指導者でもある. 後の第7代シャフツベリー伯. 初代シャフツベリー伯爵はイギリスホイッグ党を組織した人物であり, ロックの著作『教育に関する考察』も当家に対しての子育て論であるとされる.
- 91) ジーン・チャールズ・レオナルド・シモンデ・デ・シスモンディ (Jean Charles Leonard Simonde de Sismondi 1773-1842); スイスの経済学者. 歴史家, フランス革命の後英国に逃れ, ついでイタリアに居住し後にスイスに戻りジュネーブ大学の古代史, 文学史, 経済学講師となる. ナイチンゲールの母親のフランセスとアレン家とは古い付き合いであり, アレン家の娘ファニー・アレンは女性の権利運動の前衛, 姪のエマはダーウィン (注97) 参照) と結婚, ジェシーはこのシスモンディと結婚していた.

- 92) Cecil Woodham-Smith (1950); Florence Nightingale, (武山満智子他訳；フロレンス—ナイチンゲールの生涯上巻, pp30-33. 現代社, 1987年.)
- 93) アブラハム・ハロルド・マズロー (Abraham Harold Maslow 1908-1970); アメリカの心理学者. 彼は人間性心理学の最も重要な生みの親とされている. これは精神病理の理解を目的とする精神分析と, 人間と動物を区別しない行動主義の間の, いわゆる「第三の勢力」として, 心の健康についての心理学を目指すもので人間の自己実現を研究するものである. 彼は特に人間の欲求の階層 (マズローの欲求のピラミッド) を主張した事でよく知られている.
- 94) Abraham Harold Maslow (1964); Toward A Psychology of Being, (上田吉一訳；完全なる人間, p11, 誠心書房, 2000年.)
- 95) Abraham Harold Maslow (1964); 前掲書94).
- 96) ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer 1820-1903); イギリスの進化論哲学者. ダーウィニズム (Darwinism ダーウィン《注97参照》の進化論) の指導的提唱者.
- 97) チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin 1809-1882); エジンバラ大学で医学を学ぶがこれを嫌い, ケンブリッジ大学で神学を学ぶ. この時期に昆虫学と植物学に触れ, パタゴニア探検 (1831-1836) の職を確保し, 5年に渡る探検中に諸国の動植物や地質の詳細を得て, 出版した.
- 98) 清水幾太郎編；世界の名著46, スペンサー, 『科学の起源』, pp337-396, 中央公論社, 1995年.
- 99) 清水幾太郎編；世界の名著46, スペンサー, 『進歩について—その法則と原因』, pp399-442, 中央公論社, 1995年.
- 100) 清水幾太郎編；世界の名著46, スペンサー, 『知識の価値—教育論第一部』 pp445-486, 中央公論社, 1995年.
- 101) 清水幾太郎編；前掲書100), p457.